

聖書箇所：マラキ書3章1～12節

説教題：わたしは帰ろう

## 1 洗礼者ヨハネ

クリスマス待降節第三週に入りました。旧約聖書を開き、信仰の大先輩たちがどのように救い主を待ち望んでいたのかを考えて参ります。

マラキは、紀元前およそ430年頃に活躍した預言者であると言われていています。前回見ましたゼカリヤの時代から七十年ほどたっております。ゼカリヤは「あなたの王があなたのところに来られる」と言い、それを聞いた人々は熱心に主を待ちました。しかし何年待っても来る気配はない。じょじょに信仰の熱も冷め、人々の心は無関心になっていきます。そんな時代にマラキは語りました。

何を語ったのかをこれから見ていきますが、実はマラキ書3章1節のみことばはのちにイエスが引用されていますので、今日はそこから出発したいと思います。

場面は、洗礼者ヨハネが牢獄にとらわれたときのことで、彼は自分の弟子をイエスの所に派遣し、このような質問をいたしました。

「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」(マタイ11章3節)

イエスはヨハネの弟子たちの質問に対し、こう説明します。「この人(洗礼者ヨハネ)こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。」

表現は少し違いますが、マラキ書3章1節前半のみことばを引用して洗礼者ヨハネ

のことを説明します。

マラキはかつて預言していたのではないかと。神は、まず道を整える者を遣わされる。その後、あなた方が長年待ち望んでいた救い主が来られる。それも唐突に感じられるほど思いがけない形で来られる。イエスはそのように教えました。

「おいでになるはずの方は、あなたですか。」イエスはヨハネの弟子たちの質問には、直接には答えはしません。その代わりに、イエスはマラキ書のみことばを語ります。洗礼者ヨハネはすでに遣わされたのではないかと。ということは、あなた方が待ち望んでいた救い主はすでに来ているということになりますね。それはいったい誰でしょう。もちろんそれはイエスご自身のことを指すわけですが、イエスのご自分からは語りません。自分で考えるようにさせて、ヨハネの弟子を帰します。

## 2 わたしのところへ帰れ

### (1) 方法は？

マラキ書に戻ります。ここでは、やがて来られる救い主のことがいろいろと書かれています。今日はその中から7節後半に着目します。「わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところへ帰ろう。万軍の主は仰せられる。しかし、あなたがたは、『どのようにして、私たちは帰ろうか』と言う。」

神に立ち戻りなさい。そうしたら、神は私たちのところに来てくださる。そのような順

番です。この命令を聞いて、人々がどんな反応をするか、神はよく知っておられましたから、先取りしてこうも言います。「しかし、あなたがたは、『どのようにして、私たちは帰ろうか』と言う。」

「神のところへ帰りなさい。」と聞いたとして、そのとき私たちの頭に真っ先に浮かぶのは何か。「どのようにしたら帰ることができるのか。」つまりどんな方法で戻るのか。もっといま風に言えば、「神に帰るためのマニュアルを教えてください。」

今の時代はマニュアルだらけです。幸せになるためにはどうしたらいいか。若々しい健康な身体を取り戻すにはどうすればいいか。そんな人々のニーズに応えるために、本屋さんにはたくさんのマニュアルが並べられています。今も昔も変わらない。人々はわかりやすく手っ取り早いマニュアルを求めようとします。

## (2) 方法ではなく

キリスト教も例外ではありません。聖書をマニュアルのように読む人たちが現れました。その代表が律法学者、パリサイ人たちです。彼らはモーセの戒めをマニュアル化します。安息日には家から1キロ以上歩いてはいけません。安息日には、たとえ腹が減っても畑で収穫をしてはいけません。それが罪から救われる方法なのだと教えました。しかし、イエスが彼らを徹底的に批判されたことは皆さんもご存じのとおりです。聖書はマニュアルではない。これさえしていれば大丈夫というような方法論ではない。そのようにイエスは教えました。

マニュアルではない。方法論ではない。で

はどうすれば神のところへ帰ることができるのでしょうか。

## 3 神のものを盗んでいる

### (1) 何を？

8節を読みます。「人は神のものを盗むことができますか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか。』それは十分の一と奉納物によってである。」

人々は、神に対して十分なささげ物をしていて自信をもっていたようです。だから神から「あなたがたは神のものを盗んでいる」と聞かされて驚きました。「そんなはずはない。盗んでなんかいません。」

自分たちはきちんとやっていると信じていたのに、意外なことにあなたがたは神のものを盗んでいると言われました。いったい何が問題なのでしょう。

10節。「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。」ここだけ読めば、神はささげ物が足りないと言っているように聞こえます。宝物倉をあふれさせるくらいにささげなければ、神は私たちのところには来てくださらない。そうしなければ私たちは救われない。そんな極端なことではないにしても、ささげればささげるほど、神は天の窓を開いてくださって、大きな恵みを注いでくださる。そのような勧めに聞こえます。

しかしどうでしょう。なにかひっかからないのでしょうか。どこかの新興宗教が言っているのと変わらない。地獄の沙汰も金次第。10節だけ読めばそんなふう聞こえてしまう。でももし本当にそうなら、そんな神などまっ

ぴらごめんです。まさか聖書がそんなことを語るはずはありません。ではどのような意味なのでしょう。

## (2) 盗んでいるものがある

神が本当に問題にしていることはなんであったのか。14, 15 節を読むと見えてきます。「あなたがたは言う。「神に仕えるのはむなしきことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益になろう。今、私たちは、高ぶる者を幸せ者と言おう。悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる」と。」

神が問題にしていたのはお金のことではない。目に見える形あるものを言っているのではない。もっと別のことです。

今の世と同じように、マラキの時代も悪が栄えているように見えました。神を信じない人たちのほうが幸せに暮らしているように見えます。高ぶる者が大手を振って歩いているとも感じます。そんな現実の中でどんなふうに生きていくのか。人々は悩みます。

そんなとき、ある人は考え始めます。「きれいな事ばかり言っても生きてはいけない。みんなやっているのだから、まごまごしていたら先を越されて損をするだけ。他人にさえ迷惑をかけなければ、何をしてもかまわない。都合の悪いことがあれば、隠しておけばいいだけだ。」

神が指摘しているのはこのことです。このような生き方こそ、神のものを盗むことになるのだと語っています。いったい何を盗んでいるのでしょうか。ひとことで言えば正義ということでしょう。神の正義が踏みつけられているのです。それが神のものを盗んでいるということです。

神の正義があなたがたのところにあるのかどうか。神はそのところに目を留めようとされます。神の正義があるのなら、神は私たちのところに帰ってくださる。と言います。

## 4 わたしは帰ろう

しかし、ここで問題にぶつかります。神の正義があるのなら、神が帰ってくださると言うけれど、私たちはいつも神の正義を守ることができるのか。

ある方は言います。「私の心の中にあることと言えば、何を着るか、何を食べるか、どこへ行くか、世の楽しみ、心を楽ませることばかり。神のことを考えるのはせいぜい日曜日の礼拝の時間くらい。あとの六日間、私の心には神はおりません。こんな私に神の正義なんかありません。ということは、神はわたしのところに帰っては来ないことになる。」

安心してください。聖書には何と書いていますか。七日間、四六時中神のことを思い、神を讃美しなさい。そのような者の所にだけ、神は来てくださると書いていますか。いいえ。神が語っていることはもっともっと単純なことです。高ぶる者が悪を行い、栄えるのを見るとき、こんな不公平なことがいつまで続くのかと心を痛める者のところへ帰ると言っているのです。何度も言いますが、私たちは神の正義を守れと言われているのではない。神の正義がないことを悲しんでいるのかどうか。そのことを言っています。

これは何か特別なことですか。いいえ。普通の人なら誰もが持っているものではないですか。

震災で多くの方が家を失い、家族を亡くし、子どもを失いました。そのことを見て、私た

ちはどう思いましたか。かわいそうだと思います。何とか助けたいけれどできないと思いました。でも、何もできない分を見て無力感に襲われました。

また、中にはこんな不公平なことがあっていいのかと憤りを感じた方もいたでしょう。神はいったい何をしているのか、神はどこにおられるのかと、神に怒りをぶつけた方もいたでしょう。

そんな人は、神の救いにあずかれないのでしょうか。神に怒りをぶつける人のところには神は来られないのでしょうか。聖書は何と書いていますか。私たちの目の前で起きている不公平なこと、理不尽なことに痛みを覚える者にこそ、主は来られる、主は帰る。そう語ってくださっています。

世の事ばかりではない。自分のことでも同じです。自分はどんな事をしてきたのか。自分は何の役に立ってきたのか。いや人様にいつも迷惑ばかりをかけ、失敗し、厄介者と思われ、何もささげるものもない。いつそ死んでしまったほうがましだったかもしれない。そんな惨めな自分なのだと落ち込むことがある。どう見ても自分には何の正義もない。それが私だと悲しみます。そんな人のところに主は来られないのですか。いいえ。とんでもありません。心を痛める者を主は顧みてくださると言うのです。

事実、マラキが語ってからおよそ 430 年の後、主は来られました。なぜ来られたのですか。人々が正しく生活し、神の義を完全に守ったからですか。いいえ。反対です。神の義にほど遠い私たちであると、私たちが悲しんだからです。そんな私たちを主は見てくださったのです。私たちの心の中にある悲しみ

を。その悲しみを何とかしなければならないと思い、人となられ、十字架におつきなろうとされます。

主である方は私たちをお忘れになる方では決してない。必ずもう一度来てくださる。主は語ってくださいます。

主の御名をあがめます。